

## ■ ■ フランス語挿入小噺～「シャンソンで覚えるフランス語」

Junko Higasa(2013.12.20)

某旅行社風に略せば GCB(Grand Champ Bureau)となる Bureau de Grand Champ...あれ？日本語にすると「オフィス大野」「オフィス大畑」「オフィス大場」どれかな？まあ、いいか。とにかくその事務所の窓辺では毎朝、愛らしい雀(piaf ピアフ)が歌っていた。その歌声を聴きながら、オフィスの主であるムッシュ・ヴァンルージュ(Monsieur Vinrouge)は、大好きな赤ワイン(vin rouge)のグラスを片手に、机(bureau)に向かって自著に目を通しながら、自分の講座にいつ聴講にやってくるかわからない台風のようなマダム・オンブレル(Madam Ombrelle)に恐々としていた。「あの人は何でもパロディにしてしまうからなあ。シャンソン・フランセーズの歌のタイトルを料理に転じてしまうもの。ハウレン草のドライカレー(カレー葉=枯葉)とか。僕の本だってどうなるかわからないぞ」因みに本のタイトルは『シャンソンで覚えるフランス語』という。歌詞・カラオケ CD 付で第三書房から 3 冊発行されている。

さてその日の夜、悠々と食事を終えたマダム・オンブレルは、ムッシュ・ヴァンルージュの予想通り、つれづれなるままに自室でパソコンに向かって遊んでいた。

さて、それでは早速、第一冊目からいってみましょうか。えーと収録曲は...愛の讃歌(Hymne à l'amour)を歌って、あれほど愛し合ったのに、冬の冷たい風が枯葉(Les feuilles mortes)を運び去っていくように、僕の手から愛の思い出を連れて去ってしまった君。聞かせてよ、愛の言葉を(parlez-moi d'amour)と繰り返し囁いた愛しい君は、もう戻らないのか。誰もが恋に身を委ねる桜んぼの実る頃(Le temps des cerises)に愛の歓び(Plaisir d'amour)を手に入れて僕は有頂天だった。パリの空の下(Sous le ciel de Paris)で愛を語り合いパリ祭(À Paris, dans chaque faubourg)にも出かけた。月明かりで(Au clair de la lune)ほのかに煌めく君の横顔を見つめて きよしこの夜(Douce nuit)を歌いながら祝ったクリスマス...。フムフム、なるほど。

では第二冊目は...祭りの踊りの人波の中で出会ったサン=ジャンの私の恋人(Mon amant de Saint-Jean) はとても素敵だった。その時はバラ色の人生(La vie en rose)が目の前に広がったの。でも詩人の魂(L'âme des poètes)が愛の言葉で二人を結び付けてくれる前に、群衆がどんどん彼を遠くへ押しやって、私から引き離してしまったの。つないだ手の中に残った彼の温もりはアヴィニヨンの橋の上で(Sur le pont d'Avignon)輪になって遊んだ子供の頃の楽しい思い出を呼び起こしたわ。澄んだ泉にて(À la claire fontaine) ディ・ドウ・ダー(Di doo dah)と歌う恋は水色(L'amour est bleu) だけれど、私の恋は灰色よ。二度と戻らない恋に伝える さよならを教えて(Comment te dire adieu) ハイハイ。了解です。

そして第三冊目は...パリのお嬢さん(Mademoiselle de Paris)は、青色のジャヴァ(La java bleue)という美しい踊りを披露する青年に恋をした。その街角(Coin de rue)から眺められる港には一艘の小さなお船があったよ(Il était un petit navire) 船乗りの彼は、いつも陸に上がるとミーハーなブロンド娘のそばで(Auprès de ma blonde)適当にくつろいでいたが、そのお嬢さんとは本物の恋に落ちた。彼女は「枯葉」という歌をよく口ずさんでいた。けれど身分という感覚の相違だろう。二人に悲しい別れがやってきた。そして青年は彼女が歌っていた枯葉に寄せて(La chanson de Prévert)自分の思いを歌にした。傷心の彼に友達は言った。彼女を忘れるために君の新しいアイドルを探せ(La plus belle pour aller danser) オー・シャンゼリゼ(les Champs-Élysées)と明るくシャンゼリゼ通りを往けば、きっと明日が見えて来るって。ね！

因みに上記フランス語の発音は、上述本・辞書・他人、の好きな所から得て下さい。